

2010年度フルブライト中部同窓会・EWC 同友会

愛知大学車道校舎本館13階 第3会議室

2010年5月23日(日)

講演1：4時—4時50分

テーマ：「アメリカの大学院教育」

副題：学際性（アメリカン・スタディーズ）の体験から

四国学院大学名誉教授 加瀬豊司 (Toyoshi Kase, Ph.D.)
フルブライター 1974-76 (75 更新) 全額支給大学院プログラム

<用語>

WSU (Washington State University) ワシントン州立大院修士課程
(All-expense Graduate Program)

UMCP (The University of Maryland, College Park) 州立メリーランド大院博士課程
(Sabbatical Leave / 1992 四国学院大学研究年期)

AMST (American Studies), “Amster”

Department of American Studies, College of Arts and Humanities を広い意味の departmentalization と
して捉え「学部（組織化）」として表現。

はじめに

一昨年四国学院大学を定年退職し、名古屋に戻ってまいりました。文学部（英文学科・言語文化学科）と修士課程・文学研究科（比較言語文化専攻）で教えながら、日系アメリカ人の研究を「移民母村」の多い瀬戸内海地方でしておりました。香川に赴任当初は、車の番号に「高知」とみると愛知、「愛媛」も愛知でしたが、20年以上もいるとついに逆転してしまいました。星野先生、すみません、「愛大」はまだ愛媛大を連想してしまいがちです。当面、フルブライト「四国」同窓会からの“転校生”としてお許し願いたいと思っています。とにかく名古屋は22年ぶり、その変化に驚くと同時に、今も道に迷っています。現在の愛読書は「街の達人、デカ字の名古屋ロードマップ」です。こんな状態で、本日講演をさせていただき、「恐縮」と「緊張」をしております。いろいろご迷惑をおかけするかと思いますが、今後共よろしくお願ひ申し上げます。

西海岸にあるワシントン州立大院 (WSU) の修士課程 (フルブライト) での 74・75・76 年の後、東海岸の州立メリーランド大院 (UMCP) の博士課程 (サバティカル) で 92・93~2005 年にワシントン D.C. の郊外、メリーランド州で過ごしました。サバティカルの 92-93 年以降はずっと四国学院大学でフルタイムで仕事をしていましたので、長期の休み (夏・冬・

春)を利用してアメリカ通いをしていました。その間、専攻分野はずっと「アメリカ研究」でした。生活・滞在・旅行型で通算30年間、いろいろなことを経験いたしました。フルブライター、EWCのグランティアの方々は当然それぞれの領域で貴重なそれぞれの体験がある訳ですが、その専門分野固有の内容よりも、その中身を外側から支えている枠組み、つまり教育の「制度や方法」に共有できる要素がより多くあるように思います。この意味で今日の講演会では、専門・研究の内容ではなく、アメリカの大学院教育に関わる“フレーム”に焦点を当ててみたいと思っております。

体験をベースにしていますが、体験談は共有できる要素がないと退屈になりますし、愚痴話や自慢話はこれまた嫌な気分になります。同窓会ですので正直になって、アメリカでの悪戦苦闘の中で、どのように教育に関わり、どのように感じ、どのようになったかを、自分なりの“felt-reality”としてしばらくお話をさせていただきたいと思っております。

記述系の“学際性”のプログラムに身を置いていましたので、heuristics (発見)と、hermeneutics (解釈)という研究の2側面においては後者の「解釈」、そしてその解釈内容を表現する最も重要な手段としての「記述」の世界で“暗中模索と悲喜交々”の生活をしておりました。こんな話が少しでもお役にたてばと願っております。

A. 学際性の理念と制度

私の場合、修士・博士課程とも一貫して学際研究型の American Studies でした。学際研究のアメリカン・スタディーズ、AMSTは制度として反学部化 (anti-departmentalization)で始まりました。

私の留学した70年代、WSUの American Studies では組織上 Dept. of English に正式所属し、専攻を English/American Studies と称しておりました。カリキュラムはアメリカ文学とアメリカ史の両方がバランスよく配置されており、American Studies のセミナーを合すると合計30単位 (3単位の10科目)以上がコースワークとなっていました。当時の学際性 (interdisciplinarity)としての American Studies は、文学の「普遍性」と歴史の「個別性」の相矛盾と思われる二要素の「結合と融合」を理念・目標にしていました。

しかし当時、アメリカン・スタディーズ・プログラムとして立ち上げた (英)文学部と歴史学部の真剣さは、担当の両学部教授陣の眼の輝きからはっきりとうかがわれました。文学の普遍的な美的価値 (aesthetic merit) と特定の時間と場所に根ざす史実証性 (historical evidence) の統合は、プログラムにとって永遠の課題のようでした。しかし今から思えば、この結婚は“家庭内離婚”のように思っています。

時間はとんで90年代、私の UMCP 博士課程 (アメリカン・スタディーズ) の全コースワーク修了時の最終総合試験 (Comprehensive Exam) において、「理念と方法」分野の中の選択問題の一つに「文学と歴史の関係性」が出題されました <資料1>。文学系教授の中には「文学のテキストに歴史社会性が乗り込んでいる (superimposition)」と論じ、また同大の歴史学者の中には「歴史 (historiography) は解釈そのものだ」と切り込み、その記述性

における文学的価値を重要視していました。文学と歴史の関係性は、昔も今も AMST の重要な議論になっていました。

実際の学際的アプローチとしては、文学であれ、歴史であれ、「テキスト」を「より大きな社会的な脈絡 (a larger context) に関わらせる「関係性」の追求が、両大のよくあるスタイルでした。制度として細分化した学部内では、複数領域を横断し、それらに関連づける学問的方向は出にくいことから、AMST の「学部化」自体は、学際性理念から照らし合わせて言えば、“自殺行為”として問題視されていました。しかし、UMCP は制度化しないと予算も秘書もままならぬという現実から、WSU のように個別の学部教員の「出向&寄合い」方式ではなく、独立した AMST の学部を組織化し、ファカルティを Department of American Studies 所属の専任教員で構成しています。AMST を念頭に置いた Amster による AMST のための Department です。専任教員 11 名でそれぞれの専門領域 (文学、エスノグラフィー、文化、移民史等) を深化させ、かつ、領域の枠を超え、より大きな「アメリカ (性)」 (“あれば”) というテーマに関わらせるというものでした。またカリキュラム上どうしてもカバーできない分野は、院生達が、文化人類学、社会学、教育、コミュニケーション等、他学部の提供授業を一定の範囲内で関連領域 (supporting field) として履修する方法が取られていました。

B. 教育課程 (Beyond MA— 30 単位以上)

全体的なカリキュラム構造は、UMCP の Ph.D. の場合、10 科目 (30 単位) 中、7 科目 (21 単位) ~ 8 科目 (24 単位) と 7~8 割が AMST Proper。内訳は以下の通り。

Course Work (30 hours required + 12 hours of AMST 899)

- 1) Pro Seminar
- 2) AMST Seminars (9 hrs.) with CORE AMST Faculty
- 3) AMST area of concentration (9-12 hrs) (この表現はハーバード流)
- 4) Supporting field (6-9 hrs)

<Department of American Studies Ph.D. Worksheet より>

博士課程履修のタイムラインは CCPDD <Course + Comp + Prospectus + Dissertation + Defense> が多くの大学院で共有されている全貌です。

履修の修了後、三領域 (「必修領域」の AMST の歴史・理論・方法、「選択必修領域」、「自由選択」として関連領域) からそれぞれ 25 枚程度の筆記 (論文形式) の総合試験 (Comprehensive Exam) <資料 1> が課せられ、合計で 70~80 枚。次に博士論文審査委員会に 5 人の教授を依頼。了承後、「office hour and/or appointment」を活用し、機会があれば指導を乞い、その後を追っかけまわしていました。Prospectus (予備審査) には、論文のイントロダクションを提出し、その 5 人から質問攻めでした。rationale (理論的根拠) で議論しないと、とうてい勝てない (自分の領域なので密かに勝とうと思っていた) が実感でした。

論文提出後の Defense (最終口頭試問) は文字通り最終段階なので、合否の決定に関わることは勿論のこと、例えば審査教授の欠席の場合に立てる代理教授の決定手順、また日頃直接指導で関わらない大学院の代表教授の当日の本人確認等々、事細かに文章化がされていました。驚くほどアドミニストレーションが慎重 <資料 2> でした。これらは accountability という名のアメリカ的情報公開と説明責任の反映と理解しています。

しかし自分のコンプの際、大学側に (私にも) 予期不能の事 (3日続いた大停電事件 (blackout)) が発生しました。ディフェンス日程は延期、帰国当日の早朝 2 時間のみに急遽全員のスケジュールを組み込んでもらいました。ディフェンス終了後、合否の結果を別室で待つことになりました。10分後、部屋に入ってきた Dpt. Chair が一言、“Hi, Doctor Kase!”。今までの論文指導における「言葉攻め」を忘れさせるような単純明快な「呼びかけ即合否結果」でした。瞬間、この圧縮のコミュニケーション・スタイルについては“Hi, Jack.” の呼びかけは“ハイジャック”を含意) を思い起こしましたが、すぐ次の瞬間、対比して思い起こしたことは 4 年前の口頭試問 (prospectus) でした。長時間、矢継ぎ早に問われ続け、胃が痛くなった prospectus でしたが、今回は思いがけないブラックアウト“助けられ”、短縮のディフェンスでした。(20年にわたる今までの渡米経験にまで遡れば、ホテル火災、狙撃隊との遭遇、ストライキ、ブリザード、トルネード、ハリケーン、9. 11 等々、多くのアクシデントで貴重な時間を失いましたが、最終的にはブラックアウトのおかげで 2 時間の博士号スピード取得。) 終わりよければすべてよし。本当にラッキーな最後でした。

C. コースワークと評価

論文に対するコースワークとの関係を大事にしている点は、どの先生も同じで、初めから授業の全貌は「事細か」と言うより、「事明らか」にされていました。20世紀の終わり頃から日本の大学でも「シラバス」、「学生による授業評価」、「GPA」、「成績評価の厳密化」等々よく話題になってきていますが、WSU にいた 1970 年代の頃にはこれらは既にあった大切な教育要素でありました。(ただ成績評価については、これとこれを出して何ポイントずつ、発表点が何パーセントと基準を細分化 (grade breakdown) した教授もいた。) GPA (Grade Point Average) は昔も今も大学院の正規登録では A/B/C/D:4/3/2/1:F/0 (UMCP では 2001 年以降成績評価 (transcript) に +・-、ただし +・- 自体は計算に入れない) 計算式は 4 点満点の合計点 ÷ 科目数 (単位数が異なる場合は比率で) <資料 3>。(日本では、大学受験用に高校から大学にだす調査書の評定平均の計算方法と似ている。) アメリカの大学院では B (3.0) Average “以上ないと”(“異常な意図”と頭に定着)、課程からキックオフと両大学のオリエンテーションで何度も聞かされていました (学士課程は C 以上)。WSU の International Office からは full-time student にとって「異常な意図」となると、「フルブライト奨学金終了と日本へ強制送還」、脅されていました (次の学期で B 平均以上に回復すれば OK の執行猶予あり、とすぐ後で分かったが)。

授業 (セミナー) そのものの成績評価は、一つの授業 (3 単位) について 30 枚前後の

seminar paper (小論文) が必須。膨大な読書量 (広範囲からとられた関連文献箇所コース・パケット [版權を払ったコピー集、よって高値。一冊 1 万円前後]、一冊単位の特設教科書数冊～10 冊と配布プリント類) に基づく授業中のディスカッション。(修士課程では学部生も一部とれる授業をとったことがあったが、blue book [青表紙の記述式試験の小冊子] に論述する試験付。) WSU、UMCP 共、それぞれ 10 科目 (30 単位) 以上が課程修了に必要な総単位数。コンプとプロスペクタスを含め、コースワークの paper だけでトータル 900 枚以上憑かれた様を書いていました。学生がする「授業評価」は○で選ぶ選択肢方式よりは、質的記述がほとんどでした。70 年代の WSU では学生が書く「授業評価」の取り扱い「担当教員に渡すのは成績評価が終わってからで、それまでは研究科長が管理」と詳しい説明付きで、かなり慎重かつ意識的に取り組まれていました。しかし 90 年代の UMCP では、授業評価は当たり前になっているせいか、何かさばけていた雰囲気と感じていました。

もっとも恐ろしかったのは、授業細目 (シラバス) でした。全体的な授業目標と各授業の目標、授業内容、教員サイドからの何をどこまでするかといった academic expectations は明解そのものでした。その裏付けとしての「課題図書」、「推薦図書」、「関連図書」を合せると読書量は超膨大。この reading の“傾斜”つき expectation の中で、上位の成績のためには推薦・関連図書の読破とその文献処理が肝要。このような要求水準については、プリントアウトされたシラバスと授業中口頭でも念を入れた事前説明がされていました。

同様に、フィールド・ワークを伴う科目に慎重な配慮が文言化され、徹底した周知が行われていました。リサーチャーとしての“倫理”は、学内では「human subject review」と呼ばれ、厳正な手続きが必要でした。インタビュー (許可を得てテープ取りをした場合、研究後そのテープは誰のものといった ownership の明示も含む) 等、研究対象に人間が関わる場合、事前同意書 (informed consent) を付けた細かい書類を授業担当者とアドバイザー連名で大学側に提出。研究者のスタンスに関わる human subject は全学の検討委員会の許可がないと研究も論文もストップしてしまいます。

これらの多岐にわたる説明を含め、詳細なシラバスは学生にとっては緊張の世界でした。しかし (ちょっと頑張っただけ) その知的な刺激にワクワクもしました。シラバスの構造は、授業進度よりは、授業での深度を表わすことが中心であり、学生の知的訓練を狙う教授の意図は、明示された深い中身から明らかでした。教授陣は授業を通して学生を成長させるやり方を知っているし、「知的やらせ」も the sense of humor で学生をのらせてしまうので、「知らない内にやっていた」と今も感服しています。授業内外で集めたシラバス集、シラバイは現在も“愛読書”の一つになっています。

返却されたペーパーの評価については、その理由が分かる充分詳しいコメントが担当教授よりあるので、成績の善し悪しに関係なく気持ちがいいものでした。(本当は怖い。) 実は WSU と UMCP で一科目ずつ途中の段階で失敗しています。WSU では、学期途中の paper で、ある文学作品の 2 つの比較研究するところ、さらにもう一つの作品を含めてしてしま

い結果はD (“You didn’t follow the instruction.”)。青くなり、すぐ交渉して rewrite のチャンス
を1週間もらいBに回復。こんな時は深夜まで図書館に残り、ウィークエンド返上で苦し
い日々の連続でした。UMCP では、一年目の最初の学期、日系移民について日本語から英
語への翻訳文をどう paper に組み入れるかで「移民史」担当教員との行き違いがあり、paper
にはなんとFと書かれ rewrite。(Fと書かれた12月の当夜、授業後の夜、外側がフィルム
状に凍りついた車の中で、一時間仮死状態になっていました。)後で気を取り直し、質・量
向上に必死になり、2週間かけて60枚近い“大作”を提出しました。しかし悔しいこと
に書き直しという理由で最終成績はC。このCを消すために次学期、死に物狂いでAを取
り、回復できましたが、全く青息吐息そのものでした。

成績全般については、WSU での修士時代後半あたりからは、評価はAだなと思えばAが
取れるようになりましたが、20年後のUMCPの博士課程は予想とは一ランク違っていま
した。A-paperのつもりがBでした。(せめてA-が欲しかった。次の学期は意識と感覚を
変え、必死でAが増やした)。しかし正直なところ、首都圏にある research university として
の大規模州立大での記述系授業で、Aを取るのは至難の業、自分は非英語圏出身だからと、
半ば諦めてはいましたが、無念。留学の初期には、「あなたはフルブライト生だから英語は
問題ではないよネ」と軽く言われたこともあります。冷静に考えれば、博士課程担当の
文学系アメリカ人教授の「言語芸術」には、今のところ全く「降参」しています(たぶん、
永久に太刀打ちできないと確信)。

アメリカの修士・博士課程にそれぞれ短・長期に在籍し、途中の paper 段階は ABCDF の
全部を経験しました。簡単に暴露すると正式な成績表 (transcript) には両課程とも DF はな
く、Cは前述の書き直しのC以外、CはUMCPでの初学期登録の文学関係1科目だけ。WSU、
UMCPとも後半はAが最多になったものの、今でもGPAと聞くと、当時の必死の思いが生々
しく蘇ってきます。しかしUMCPでのABCの散りばめられた「厳密な成績評価」と「評価
の誠実さ」には“ずいぶん喜んで”もいます。英語の論述に関する私のアメリカンドリー
ムはナイトメアと背中合わせでしたので、非英語圏出身で、記述系の博士課程でオールA
のPh.D. Holderの方々は全く尊敬してしまいます。

D. 社会人院生

社会人に対して大学院での修学を可能にするためWSUもUMCPも実際の授業は夜間開
講が半分以上でした。もう一つは学籍期間の保障。在籍期間はそれなりの理由があれば柔
軟な体制が敷かれていました。こんな制度の中で、WSUは最短の18カ月(summer session
を含む)で修了。一方UMCPは日本での勤務校との関係で最長の12年弱。UMCPでは5
年以内にコースワークを終え、更に5年以内に論文を書き終えないと大学院からキックア
ウト。ただ半年は嘆願書(petition)を書けば延長可で、更に半年は理由があれば(justificable)
延長可。さらなる6カ月は“危機管理”に相当する“執行猶予”としての機会のみでした。
この最後の延長機会は、論文の進捗状態が分かる実際の論文を指導教授に見せて、実績と

見込み（論文の半分もしくは2/3以上完了等が条件）があれば、論文指導代表教授とデパートメントの長と連名で書類を提出。そして大学の最終判断。（許可された後はどんな物理的な不可抗力が半年後に起こっても自動的に即、不可。）

この3度目の嘆願書に対してはGraduate Deanから警告書をもらいました。“~ as this is absolute, final, unalterable, and set in concrete. Under no circumstances will another appeal or petition be considered for further extensions of your present status.” —いわゆる最後通牒でしたが、これによって今回は必ず完成と強い後押しを得ました。“Your dissertation should be the intellectual culmination of the course.”ともいわれます。一定の制限はあるものの、制度上、授業で培った研究の質をつぶさないという意味の“質保証”と受け取っています。総合的にみるとコースワークの後、dissertationの完成ぎりぎりまで年限を延ばしている（延ばさざるを得ない）長期在籍院生に対して、大学が行う学位取得の“応援型”と言えましょう。（この間、論文完成まで最低一単位は継続して登録。最低10単位でGPAの計算には入れないが、成績は通常のA~FとS(atisfactory) / U(nsatisfactoryがつく。)

E. 専門領域

アメリカについて何がアメリカ的 (What is most American about America) か、といった追求や、一言で言う“Americaness”は、内容の深い追求であっても、アメリカ全体を固定して取り扱う「文化本質主義」に陥りやすい考え方のスタンスです。こういった根強いステレオタイプはもはや時代遅れであるかもしれませんが、自文化中心主義に基づく優越主義 (assumed superiority) がとかく頭を持ち上げやすくなるのも事実です。

首都ワシントン D.C.の御膝元であるメリーランド州の、この4万人を超える大規模校である UMCP は、広く関係性の中での構築、the social construction or reality つまり「文化構築主義」を意識的に大事にしているようでした。それは東部のハーバード大の“grand narrative”（“新天地” マサチューセッツから始まる intellectual history が “authentic, legitimate”）の雰囲気に対して、意識的に距離をおく姿勢が生み出すものだと思います。しかし、まだハーバードに知的貢献で後れを取っているのも事実。（世界の AMST での最初の Ph.D.学位はハーバード大の Henry Nash Smith。著作に *Virgin Land*。ハーバード大から Myth and Symbol School 学派が発祥。）ハーバード大を意識してか「UMCP の AMST は残念ながら世界第二位」と、“自嘲”とも“気概”とも取れる自己評価を先生方からよく聞きました。案の定、“myth – symbol” approach はコンプにも出題されました <資料1>。

首都圏のニューイングランド地方へのこのライバル意識は、UMCP に在籍中、地理的な競争とも受け取っていましたが、私にとってはもっと重要なことが一つありました。何故、ここ UMCP の AMST のプログラムには「移民史はニューヨークのエレス島からで、太平洋からのサンフランシスコのエンジェル島経由がないのか」という問いかけでした。太平洋移民は、ここ東海岸では“under-representation”なのだろうか。さらに言い切ると、このことは「非白人の研究者・学者には知的な貢献が望まれず、情報提供程度だけで良い」とい

った低い社会的期待値と同義なのだろうか。このような“もやもやした”疑問は卒業後に UMCP を訪れた時、全員（移民史の担当教員は他大学に転出）の AMST の所属教授と秘書からの“答え”—“Did you meet Dr S...?” で氷解しました。日系人教授 S 氏を Dpt. of AMST の専任教員として採用とのこと。基本コンセプトを「文化多様性」に変え、カリキュラムを新しくしたとのことでした（この Diversity Advocate への模様替えは、できれば、在籍中にして欲しかった）。

一つに焦点に当てて追求することは、集中した自己努力を必要しますが、「文化構築主義」にある「関係性の追求」は方法論が厄介です。相互作用は相手への影響と相手からの影響で一筋縄ではいかないことが特徴。相互性の根源は自分が歴史を構成すると同時に、自己もそれに拘束される相互拘束性です。それを受けて“~ within which I am a part” という表現は各授業で同時多発していました。「ノイラート (Neurath) の故障船」(航海しながらの船の修理) のメタファーや、芥川龍之介の『侏儒の言葉』にある「我我は人生と闘いながら、人生と闘うことを学ばねばならぬ」は相互依存の考え方でありましょう。相互の影響行為は動きの中で物事をとらえるインタラクションであって、この動態相が「文化本質主義」の“固定”観念を嫌っている理由であります。

文化人類学学者のクリフォード・ギアツ (Clifford Geertz) は、他文化の文脈を大切にし、その記述の方法を厚い記述 (thick description) と特徴づけていますが、相互行為を論じる場合も同様、言葉が厚くなりがちです。UMCP の dissertation の指導教授の一人は、日本でも研究歴のある日本通のユダヤ系アメリカ人でした。「学際的学問は“learning along the way”で行けば?」、と動的側面を念頭に置いた励ましをこの先生からよく受けていました。関係性を論じれば、いや論じ切らなければ相手に伝わらないから、まさにここに自分の意見を述べる“厚い”ものが存在し、調査・報告よりも「解釈と表現」が肝要、と指導され続けていました。集めたデータを使って何を達成するかが肝要 (use ~ to achieve ~) と言えましょう。この目的達成のため、論述言語の必要性は当然高くなります。このように言葉による伝達の促し (communicative urgency) が生まれる故か、“Toyoshi, talk, talk, talk to death.” と、豊かな (ありがたい!) 言語世界の構築を常日頃、指導されていました。(他方、喋りまくるアメリカ人院生達には“Folks, hope you make a meaningful contribution!”)

F. “英語的”論理と表現技術

学際領域としての専門領域間の関係づけはかなりの部分、自分で議論・論述しないと成立しない領域ですので、とことん言葉による talk が必要。修士の時代「paper には説得力が不可欠で、その方法は、段落単位の展開が効果的」と嫌になるほど聞かされていました。とは言え、“日本的”論理展開が血肉となっている自分自身としては、論旨の展開については、topic sentence を冒頭に出しての paragraph 単位での展開だけが本当に論理的なのか、と割り切れない気持ちも抱いていました。初めの半年間は WSU の先生方とこの“英語的”論理についてよく議論をしたものでした。office hour に顔を出すと「また paragraph のことか」

と笑われたこともしばしばありました。

ある時 UMCP での一人の先生から次のような大文字のコメントが返ってきました。“NO MATTER WHAT, FOLLOW THE ORGANIZATION. It is, as you suggest, constraining, but constraint is necessary at final stages of a paper” (これはまた WSU 時代の論旨の展開問題の再発と感じました)。この先生からは、日本人は非常にいいものを持っているのに、言語の明晰さ (clarity) が脆弱、と手厳しい批判をもらったこともありました。日本にも客員教授等で長く滞在し、NHK にも放映された日本通の歴史学者でした。何度も何度も繰り返された一見「易しい」質問は “How do you know when you know?”。この問いにはかなり気合を入れた自分からの説明が必要でした。この説明過程でどのような「組み立て」方で自己表現するか、鋭くチェックされていたと記憶しています。(この質問は、今でも自分にとってまか恐ろしい “obsession” になっています。)

論述の expository writing に、これ以外の “自由” はないと現在は “洗脳” されていますが、この書き方の自由のなさは、「方法論的拘束」つまり、発信の作戦の側面 (implementalism) と割り切って考えています。諸外国からの留学生同士が、このロジックを使ってかなりコミュニケーションをうまく成立させているのはその成功事例でしょう。この英語的発想を活用すれば、紹介・説明のレベルではなく、意見表明の国際的通用性のあるコミュニケーション・レベルへの移行が可能ではないでしょうか。現在この英語的な組み立て方はかなり知られてきていますが、実践となると困難を伴うのが、(特に日本では) 現実です。しかし、この方法を使えば、論理に基づく双方のコミュニケーションが成立し、ディスカッションが可能になるので万人向きとも言えましょう。言葉の世界におけるこの説得術は英語のお家芸。この議論から論文も産まれているのです。この考えを勤務校の日本人院生 (修士課程) に対して、発想の転換を促した writing skill のクラスに応用してみました。彼らが日本の土壌で慣れ親しんできたメンタリティーとメカニズムを揺さぶることから始めてみました。“自己” に対する “destabilization” “deconstruction” は <資料 4> を参照下さい。

UMCP のこの先生の授業は、学生たちに議論の応酬合戦をさせ、その後先生が取りまとめるのが常套手段でした。このまとめ部分から学生は急に皆、口を閉じて、ひたすらメモ取り。「なるほどな表現」にアメリカ人学生がいたく感動しつつ、このノート取り作業を続けます。この先生のコロンビア大学院生時代、アメリカ教育史の大御所と言われていたアドバイザーと基本的な歴史観が合わず、苦労の連続。その苦しみの中で、ユダヤ的不屈な精神 (hutzpah) からか、このアドバイザーに勝るには「表現技術」と確信し、the craft of writing に全エネルギーを費やしたそうです。実はこれは「アメリカ人は英語で苦労しないから楽」と、ふとつぶやいてしまった私に対する「叱責」でした。

この先生のもとで多くの言葉による表現芸術を学びました。例えば「新しい変化に向かう気持」について、“~ the willingness to aspire and to imagine new ways of knowing, doing, and being ~” 等は「文化再構築」の議論に役立つ表現の一例です。気楽にそのまま (少しだけ

変えても) 使うと、すぐ見破られ “Toyoshi, footnote me!” と反撃されます。(苦笑、しかし厳密な academic honesty が学べた。)

私の dissertation のディフェンスの際、あの厳しかった先生方から論文について “well-organized and well-written” との評価をもらいました。ただ、議論不足の一段落のみ書き足し、その報告のみでOK、と一言、追加があっただけでした。(「合否」のことで頭がいっぱいで、修正については、重度の再提出・再評価から軽度の自己修正・報告までの詳細文書があったことはすっかり失念。)

G. 研究パラダイム

今までの読んだ文献の「理論操作」(今までの関連出版物をまとめて論文に)をし、テーマを絞り、今までの資料(インタビュー記録、古文書館で発掘した原史料)を加え、しっかり書いて、ちゃっかり博論完成!と博士候補生 [candidate] になれた直後浮かれていたことがありました。しかし、6語文で返ってきた指導で浮かれた気分はすぐに墜落。“Every good researcher can do that.” 他人の業績に乗りかかるのではなく、自分自身の論文のアイデンティティをと指導されました。自分の authorship を考え直し、独自性については、自分の視点の考察 (reflexivity) を含め、最終的にはエスノグラフィーの手法を使い、日系アメリカ人の歴史を通してみられる「文化変容」と「人間行動」の関係性を検証・論述しようと決めました。(詳細は拙著『文化変容と人間行動—ワシントンの日系二世ライフ ヒストリーを通して』学術出版会 2007 *Nisei Samurai in Washington D.C.: Culture and Agency in Three Japanese American Lives* 参照。)

そこでいろいろなエスノグラフィーのインタビューを行いました。さまざまなタイプの日系アメリカ人に対して、また同一人物に対して複数回、データ収集方法も複数回のミーティング方式から一カ月単位の住み込み方式の participant observation (参与観察) まで形態を広げました。フィールドノートを毎晩忘れずにつけ続け、膨大のインタビューのデータが集まりました。信念としての深い価値志向や時代の推移で揺れ動く感情等々、読めば読むほど面白くもなってきました。データ量をもっと増やせば、解説式のインタビュー集だけで論文完成になるのではないかと、との甘い誘惑にかられたこともありました。しかしすぐに、「データの“紹介”型ではだめ」と、また簡潔4語文 (“You can’t stop here.”) が返ってきました。指導に従って取り組めば、当然、分類・分析に始まり、洞察力に富んだ解釈・記述が必要です。まずどんな枠組みで、どうこれらを絞り込むか、あれこれ考え、あれこれ試みてみました。3世代間の文化変容をコンセプトにして、同じファミリーの一世・二世・三世を求めて北米大陸をまわってみた時期もありました。しかし、3世は全米に散らばっている離散の “diaspora” 型のため、その分フィールドワークは物理的に非常に困難であり、計画は頓挫してしまいました。

二世は日米両文化に関わっているので、今度は二世世代を中心領域とし、その日米の関係性を基にした文化変容に着目することにしました。思い切って中心人物を3人の二世に

絞り込み、深みを狙って対象にする時間的スパンはその全生涯、と幅をもたせ、それぞれのライフ・ヒストリーを多角的に解釈してその歴史記述 (historiography) を行うことに決めました。そしてライフ・ヒストリーにおける主人公の「人間行動」と「日米文化価値観」を関係性のコンセプトとし、その“lived history”の深層領域にある situated meaning を限りなく抉り出し、日系アメリカ文化論の再構築を考察することにしました。

しかし、問題は「何故、三人構成なのか」でした。これは指導教授の先生方からの当然の質問・詰問でもありました。長期休暇中(夏・冬・春)はUMCP 通い。その間“Why three?” “Why three?” “Why three?” がうわ言のように頭から離れませんでした。(これは思考の組み立てに関わる部分で、言葉の「言い訳」のできない世界。) この「三構成」の rationale を考えるだけで一年が終わり、論文そのものは書けず、前に進むことができませんでした。その1年間の dissertation credit の成績はSでした(登録した他の期間の dissertation credit の成績はすべて調子よくいったのだが・・・)。

新約聖書記述では一人の「イエス」をマタイ、マルコ、ルカの「3人」がそれぞれの立脚点で観察し、イエスの全体像をバランスよく構成しています。簡略化すれば、マタイは“選民思想”から、マルコは“人の子”として観ているし、ルカは“異邦人”を念頭に置いていると言えましょう。それぞれを“intra-nationalism” “individualism” “internationalism” との概念化も可能でしょう。この「三構成」は共観福音書 (synopsis) とよばれ、聖書の伝統が行きわたっているアメリカでは理解されやすかったもので、しばらくその「三次元構成」にかぶせて自分の研究方法を説明していました。しかし、実際の論文で絞り込んだ「三人の二世」の概念をどのように特色づけ (characterization)、さらにそれらがどのようにより大きな日系アメリカ人社会の文脈に繋がっていく (contextualization) のか、そして最後の作業として、アメリカン・スタディーズ特有の関係性パラダイムの構築 (contribution) が残っていました。

機会あるごとに論文審査委員会の先生たちと認識論や現象学の論議を重ね、最終的には「時系列」による統合枠を使って書いてみることに落ち着きました。「三時制」を日系アメリカ人の解釈枠として使い、その文脈化を英語で次のようにまとめてみました。 All three were invariably steeped in the past, actively engaged in an assessment of the present, and inspiringly cast toward future. もうほんの少し具体的に言い換えます。The nisei were plunged into formidable reality where they acted on “the present now” not by discarding their parent’ tradition as unusable, but, rather, by transforming the past as meaningfully usable to their current concern and future imperatives. この過去・現在・未来の仕分けを「過去を紡ぎ、現前の意味をつくり、未来に投げかけていく」と統合させ、この時系列を、日系アメリカ人の二世世界の多様性を解釈する枠組みとして活用することにしました。

「過去・現在・未来」の基本区分は日常世界にある枠ですし、また「史的出来事の現在の意味生成と未来への予知・洞察」の立体的統合は基本的な聖書釈義 (hermeneutics) の方法であった事にも気付かされました。(日本での勤務校であったミッションスクールのキリ

スト教の伝統にも感謝。)

三人の対象に対して「時系列」を絡ませ、それによる二世世界への広がりにはパラダイム化できる (paradigmable) フレームワークとの確信に至りました。この理論の妥当性 (desirability) は、日系アメリカ人二世の歴史の中で検証し、自分で論じなければならない記述の世界です。このような論証作業は、ホモロクエンスとしての **the burden of proof** とも言えましょう。この必要性から **the vigor of writing** が生まれ、ここに国際的に有用な文系の発信性が育っていく大切なプロセスがあると信じています。

言語は手段であり、視点・視角も何かを浮き彫りにする手段・方法です。自分自身も大切な著者 (authorship) としての存在ですが、「自己も方法論の一部」と割り切れれば気が楽です。自分の視点・視角の絶対視に対して、故ウィリアム・フルブライト氏の言った「力の驕り」(*The Arrogance of Power*) は、主体の特権化に対して **self-critical reflexivity** (批判的省察) の気づきを生み出すことになったと言えましょう。フルブライト氏は無自覚・無反省・無批判に自分や自分達の前提を当然視し、それを押しつけることの問題性を指摘しましたが、それをさらに言い換えれば、深い次元で、文化的多様性からくる豊かさ “**greater knowledge**” を半世紀前から示唆していたと言えましょう。

「手段」や「方法」は広く共有できるものであるので、学びの環境をつくれれば、制度として万人にむけた教育が成立するはずです。最終的な博士課程においても、なお授業という名の豊かな教育は成立する、こんな考えでアメリカの高等教育は、研究系の大学においても最後の最後まで授業を大切な **discipline** として実質化していると強く感じています。(再掲、“**Your dissertation should be the intellectual culmination of the course.**”)

こういった授業に関わる教授陣の学外評価について、自分のメリーランド大学博士号授与式で96ページからなる「卒業式次第」冊子に次のように記載されていました。“... **the quality of our (UMCP) faculty—with one Nobel Prize winner, six Pulitzer Prize winners and scores of Fulbright scholars —is among the finest of any research university in the United States.**” (関連拙稿記事は *The Fulbrighter*, No. 27, Winter 2007) ノーベル賞、ピューリッツァー賞の後にフルブライト賞が入っていたのはうれしかった。最後に先輩・同輩・後輩の皆様方の学問的業績と社会的貢献に対して、自分も自分なりの **felt-reality** でもって、フルブライト精神から同感できる機会を提供してくれたフルブライト・プログラムに深く感謝しています。